



このコーナーは、文書館に保存している古い写真を皆さんに紹介します。



懐かしの1枚
組合製糸の工場
昭和10(1935)年頃
高瀬町

西讃生糸信用販売利用組合(通称、組合製糸)の工場。組合製糸は上高瀬村の村長を務めた小山久吉の提唱により、昭和4(1929)年3月に設立された三豊郡東部10ヶ村の組合で、工場は7月から操業を開始した。工場は上高瀬村新名にあった。戦前は順調に事業を拡大していたが、戦後になると養蚕戸数が減少したため、昭和43(1968)年に工場は閉鎖している。

※文書館では、まちの風景や催事などの古い写真を収集しています。原本はお返ししますので、情報の提供をお願いします。【文書館 ☎63・1010】

「思い出の1ページ」

「これは上高瀬小学校の方向、東の方角から撮った写真ですね。左側に爺神山が写っているでしょう。長い煙突は、私が小学生のときに建てていたのを覚えています。道から材料を運んできてね。やぐらを組んで、コンクリートを流していましたよ」

「ありありと昔の思い出を語るのには、製糸工場があった場所の近くに住む、小山尚男さん(89)。昭和4年に工場を設立した小山久吉さんは、母方の親戚にあたると言います。

「製糸工場では、大きなボイラーを焚いていて、湯を沸かしたところに繭を入れ、煮ていました。そこから、糸を紡いで生糸を巻いていきます。湯を沸かすときの燃料には、石炭を使っていたから、煙が黒くなっていました。水もたくさん使うので、敷地内には堀がありましたよ。

工場ではたくさんの人が働いていましたね。隣の家の人も勤めていましたし、県外から働きに来ている人も多かったです。そうした女工さんのために寄宿舎が建てられていて、2階建ての建物には、台所やお風呂、トイレが付いていました。この頃は近所でもだいたいの人が座敷に柵を作って蚕を飼っていました。蚕の餌には桑が必

要となるので、近くの山や畑にはそこかしこに桑が植えられていましたね。子どもだった私は、桑の実をよくちぎって食べていましたよ。繭は、麻や豊中、善通寺の方からも持ち込まれていました」

創業時から生産量を伸ばしていた組合製糸。しかし、戦後はだんだんと化学繊維が使われるようになったため、生糸の需要は減少し、工場は閉鎖されました。その移り変わりを近くで見てきた小山さんは、「がいに変わってしまったなあ」と振り返ります。



普段の生活で見慣れている景色が、初めて来た人には感動を呼び起こす貴重な体験になるということ。特集の取材中に改めて感じました。父母ヶ浜や粟島に遊びに行ったり、夕日を見ながら海岸線をドライブしたりすると、すごく喜ばれるそうです。私たちにとっては「当たり前」の日常の中に、実は心をくすぐるヒントがあるんですね。価値を見直す視点が必要だなと感じました。